

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

文化遺産の囲い込みと使い込み：巻頭エッセイ

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/4879 |

文化遺産の囲い込みと使い込み

関 雄二（国立民族学博物館教授・アンデス文明研究会顧問）

昨年は、パコパンパ遺跡の発掘で「貴婦人の墓」を見つけ、マスコミ用の記事の執筆に追われ、学会発表や出版などにも忙殺されました。体力も気力を使い果たした感があり、そこでこの3月は思い切って休暇をとりました。職に就いてから初めての長期休暇で、妻と二人でスペインのアンダルシアを訪れました。レンタカーを借り、事前にインターネットで宿を予約したり、ふらりと気に入った村に滞在したりと、のんびりとした旅でした。私の持病の偏頭痛は、原稿の校了後などリラックスした直後に症状が出るのが常で、案の定、今回の旅でもじつに3回も苦しむことになりました。リラックスしていたことの証拠ですが、頭痛でリラックスしていたことがわかるとは、偏頭痛持ちでないとは理解できないかもしれません。

ご存じのように、アンダルシア地方は、古代ローマ帝国をはじめ、イスラム国家がイベリア半島を席卷した頃の遺構や遺跡、そしてその後の国土回復運動の結果、奪還したキリスト教世界の建築が混在し、世界遺産の数も半端ではありません。アルハンブラの華麗な装飾、コルドバのメスキータ、セビーリャの大聖堂など、古代から中世、近世の歴史を学ぶには事欠きません。こうした文化遺産に出会い、感動したことは間違いのないのですが、それ以上に旅の思い出として残ったのが、アンダルシアの山中にひっそりとたたずむ白い村々でした。

シェリー酒の語源となった街ヘレス・デ・ラ・フロンテラのボデーガ（醸造所）で何杯も試飲を堪能した後、コロンブスが出航した港を目指して大西洋に面するカディスを訪れたまでは予定通りでしたが、そのあまりにリゾート化された光景は想定外でした。宿を別の場所に求めて田舎町を目指し、出会ったのが内陸に少し入った村アルコス・デ・ラ・フロンテラでした。半月状に伸びる山の頂上に、ひしめき合う白壁の家々は、さながら、中世の村がそのまま残っているかのような錯覚を覚えたほどです。季節外れということもあり、旅人はあまり見かけず、ホテルも予約無しで、村の教会と断崖が見渡せる好条件の宿を確保できました。狭い街路に灯る白熱灯のランプが、夜の幻想的な雰囲気を醸しだし、居酒屋やレストランには地元の人々が集う、ちょうど私たちが求めていた空間がそこにはありました。

この心地よさはどこにあるのか、しばらく考えた末に注目したのは、そこで暮らす人々と建物とのつきあい方です。この村も、国土回復運動のさなかに、キリスト教世界とイスラム世界との攻防の舞台になった歴史的経緯を持つだけに、数百年前の建物が密集しています。住居はもちろん土産物屋もレストランもホテルも、みんなこうした文化遺産級の建物を利用しているのです。散歩で出会った土産物の女主人などは、気さくな人で、夕食用の豚の煮物（臭いで想像）の調理をほったらかしで案内してくれましたが、ペンション用に改造した部屋は、さながら隠れ宿。

窓から見下ろす路地では、地元の女性らの立ち話が聞こえ、部屋に射し込む柔らかな陽光は、私の身体の内部にまでゆっくりとしみ込んでいきました。繁忙期だけ開ける1階の店というのも、洞窟を利用した300年も前の部屋でしたが、壁には絵やら、飾り物を吊すために釘が自由に打ち付けられ、彼女の好みに合うように改造されていたことにも驚きです。まるで絵画か小説の世界に自分が入り込んだかのような錯覚を覚えつつ、礼を述べてホテルに戻りました。

暗闇が迫る夕刻、路地歩きを再開。こぢんまりとした佇まいのレストランに入り、表に掲げられた記念メニューの看板の意味を給仕に問うてみる。「開店何年の記念ですか」と声をかけると、「開店といっても、この家の建てられた年代からすれば、400年記念かな。はははは…」などと、ここでも煙に巻かれてしまう愉快さ。

そうなのです。歴史的遺産といえども、釘を打つな、少しでも手を触れるな、といった規制がなく、今、現在生きている人々が、自由に文化遺産の中で暮らしているのです。もちろん、坂道は急で、老人の上り下りはさぞかし難儀なことでしょう。また狭い路地は、小型車が1台通れるかどうかの狭い道で、運転する私も冷や冷やしましたが、ゆっくりと歩く老人を優先しながら、誰も不平はこぼしません。出会う人は皆、地元のすばらしさを語っても、不自由さについて不満など口にしませんでした。いいかえれば、不自由さを享受する一方で文化遺産を自由に利用することも許された村なのです。そしてこの自由さと不自由さとの微妙な調和こそが、この村の「使いこなされた美しさ」を成立させている要因でもあります。だからこそ、住民だけでなく、私たち観光客をも魅了するのでしょう。

翻って、我が国では、木造建築が主流であった頃の名残か、地震対策か、わかりませんが、破壊による全面的立て替えが村でも町でも進む一方で、文化遺産として認定された建物となると、利用が著しく制限されています。家主はその不自由さから逃げだしたいばかりに、指定地区外に住宅展示場にあるようなコンクリート・パネルの住居を建てて暮らすことすら見受けられるほどです。

囲い込まれるように保存された町並みがある一方で、1年前に訪れた場所がすっかりと変わり、記憶の手がかりを失って途方に暮れ、落胆することの多い日本と、歴史的建造物のカフェにたたくみ、主人と言葉を交わしながら、幾年を振り返ることのできるスペインのような世界。私たちは、これからいったいどこに向かおうとしているのか、今一度、自らの生活を顧みて、経済効率性のみを優先する世界に異議申し立てを行うべきではないかと、反省しきりの旅でした。